

二月二〇日(水)

さつき届いた衣装を着てから、年季の入った姿見の前に立つ。鏡面が埃まみれで、鏡としての機能を満足に果たしていない。適当に拭いて衣装にホコリがつくのも嫌だなと思っていたら、彩夏が代わりにキッチンペーパーを持って来てサツと拭いてくれた。ホコリが舞わないよう、上手に畳んで中へ織り込んでいく。

普段使わないところは当然のように掃除が行き届いていない。見ないフリをして来たけど、見てしまったからには近いうちに気合を入れた大掃除をしなくては。  
「ほらほら、前見て」

姿見のフレームに積もったホコリやら、部屋の隅に気を取られていた私に、彩夏が声をかけてくれた。私の肩を叩いて、鏡の方へ向けと指で差し、自分は鏡に映らないよう脇へ避けて座った。できることなら直視したくなかったけど、えいやと気合を入れて、自分の装いを確かめる。

「うわあ、ええー」  
着る時から随分短いなー、肌の露出が多いなーと思っていたけど、改めて向き合ってみると、かなり攻めた衣装になっている。ザ・サンタな赤基調のミニスカ。量販店で手に入る大人なアレとは違って、生地も作りも大分しっかりしていて、それなりの値段なんだろうな、という印象もある。

左右に体をくねらせて、後ろの感じも確かめた。ただでさえ短いスカートが、かなりヒラヒラと頼りない。

「コレだと、完全に見えるよね？」

鏡越しに、彩夏に同意を求めてみる。彼女はそれに応えず、衣装が入っていた箱の方へ行き、中に残っていた物を持って来た。

「あ、見せパン」

赤いスパッツスタイルのアンダーズコート。今日は履かないけど、当日はコレも着けるのか、とマジマジと眺めてしまった。ミニスカサンタのコスプレというか、チアガールの特殊な衣装といったところか。

背の高い沙綾さんや、出るところが出てる彩夏なら似合うだろうけど、背もそんなに高くないちんちくりんの私や、細身の瑞希さん、陽菜ちゃんには荷が重

そうだ。ま、当日は踊る方に必死で、他のことを考えてる余裕なんてないだろうけど。

姿見の前で自分の姿をアレコレ確かめている私を見ながら、彩夏はニヤニヤと微笑んでいた。彼女の後ろに、私が受け取ったのと同じの、未開封の箱が置いてある。

「彩夏は着ないの？」

彼女は頷いて、「ルミが着てくれたから、どんなもんかもよく分かったし」と言った。

「サイズとかもあるし、合わせとかなくて良いの？」

「うん。大丈夫」

私のところに届けられた荷物ではあるものの、箱にはきちんと「野村彩夏様」と宛名書きがされていた。取り違えがなければ、それぞれに合わせたサイズの衣装が入っているのだろう。

確認も済んだし、彼女が着替えないのであれば、さっさと元の服に戻ろう。一人でこんなのを着ていると、だんだん恥ずかしくなってくる。彩夏が持つて来た見せパンを箱に戻し、脱衣所へ行こうとすると、彩夏に呼び止められた。

「もう着替えちゃうの？ 可愛いのに、もったいない」

「自分は着ないんですよ？」

「誰かが着てるからいいんじゃない」

彩夏はスマホを取り出して、私に向けた。「ほら、可愛いよ」と言いながら、次々にいろんな角度から写真を撮っていく。私は「コラ、やめろ」と止めようとするが、彩夏に上手く躲かされてしまう。

「コレなんか、良いんじゃない？」

彩夏は写真を私に見せながら、意地悪な笑みを浮かべている。どこにアップして、誰に送るつもりだ？ 先に着替えて、データの奪取を考えよう。まずは脱衣所へ行つて着替えねば。